

○プロジェクト研究0529-1 研究課題 「いばらき「心の活力」推進ネットワークの構築」

サブテーマ 「茨城県の精神障害者の地域支援を考える」

○研究リーダー 医科学センター 講師 山川百合子

○研究年度 平成18年度

(研究期間) 平成17年度～平成19年度(3年間)

1. 研究目的

現在精神科医療は病院から地域へと方向転換されている。また2006年から施行される障害者自立支援法の施行など制度改革も行われた。この改革の中で精神科デイケアは時代や地域に即したプログラムの開発が求められている¹⁾。従来より精神科デイケアではメンバーの関係性を重視した集団療法が行われており、園芸療法もその1つである²⁾。最近になって園芸療法が精神障害の領域においても園芸療法が意欲や肯定的感情の効果が検討されエビデンスが構築されつつある³⁾⁴⁾。またしかしこれらはいずれも意欲などの心理的評価であり、QOLやウェルビーイングなどについての研究はなく、さらに周囲との関係性や日常生活への変化については言及されていない。

そこで本研究では茨城大学農学部と茨城県立医療大学と連携して開発した園芸療法プログラムにおいて主観的ウェルビーイングと家族から見た行動や感情の変化について評価し、精神障害者の地域支援の観点から精神科デイケアのプログラムとしての園芸療法の意義について検討した。

2. 研究方法

<対象> 対象は平成17年3月14日から平成17年12月19日までに茨城県立医療大学付属病院デイケアに通所し、継続的に園芸療法に参加したうち、研究へ参加の同意が得られたメンバー9名(うち男性6名、女性3名、平均年齢は32.5±8.8歳、診断は統合失調症8名、妄想性障害1名)およびその家族16名であった。

<園芸療法プログラムの実施> 園芸療法プログラムは2005年3月14日から2005年12月19日の全33回、毎週月曜日の午前10時30分～12時までの1時間半、茨城大学附属農場の圃場500㎡(20m×25m)においてプログラムを施行した。

<評価方法>

①主観的ウェルビーイング

主観的ウェルビーイングを評価するために抗精神病薬治療下主観的ウェルビーイング評価尺度(Subjective Well-being under Neuroleptic drug treatment、以下SWNS-J)を用いた⁵⁾。このSWNS-Jは20項目の質問からなり、肯定的質問と否定的質問により構成されている。最高得点は120点で合計点数が高いほど、主観的ウェルビーイングが良好であることを示す。05年4月(園芸療法開始前)と12月(園芸療法開始後8ヵ月後)の2回評価し、Student's t-testを用い比較検討した。

②家族へのアンケート 2005年12月(園芸療法開始後8ヵ月後)にアンケート用紙を家族に郵送した。

本研究は茨城県立医療大学倫理委員会により倫理的検討を受け承諾された。

3. 研究結果

①主観的ウェルビーイング 2005年4月(園芸療法開始前)は69.0±15.2、12月(園芸療法開始後8ヵ月後)は69.3±12.0と有意差はなかった。SWNS-Jは抗精神病薬の効果をみることを念頭に作成されており、非薬物療法である園芸療法では8ヵ月間の評価期間は短すぎる可能性も考えられた。

②家族の園芸療法の認識 16家族中全員が「はい」と答え100%であり、1家族以外は本人の参加を知っていた。家族にもデイケアに園芸療法プログラムが施行されていることが認識されていることがわかった。また園芸療法のイメージとしては複数回答で「野菜作り」、「気分転換」、「健康維持や体力向上」がいずれも63%と多かった。このように家族は実際のプログラムと同様に農業を中心とした集団療法的なプログラムのイメージを持っていることがわかった。プログラムは本人にしか渡しておらず本人を通じて何らかの形で園芸療法の内容が正しく家族に伝わっていることも示唆された。

③家族とのコミュニケーション 家族へ作物を渡したのは94%であり、家族内で園芸療法が話題になったことは

75%に認められた。話題の内容は複数回答で「作物に関すること」56%、「農場に関すること」「園芸活動以外のその日の出来事」はいずれも19%であった。作物は農業の達成感を象徴したものといえる。したがってメンバーと家族とのコミュニケーションに際し特に作物に関する話題が多かったのは、園芸療法による達成感を家族と分かち合っていることも考えられた。

④家族による行動や感情の変化 家族から見て本人の行動や感情に関する変化は38%が「はい」と回答した。その内容は図1のように「園芸活動を楽しみにしている様子がみられる」50%、や「作物で料理を作った」38%、「花や野菜に興味を示すようになった」31%、「家族との会話が増えた」25%、「基本的な生活能力が向上した」19%、「よく眠れるようになった」「季節感を持つようになった」とともに13%、「食欲が増した」「体力がついた」とともに6%など多く家族が「変化があった」と回答していた。精神障害においては家族との暖かい肯定的交流の多さや相互に通じ合える対話の多さなど家族の健康度がそのリハビリテーションに大きく影響する⁷⁾。集団療法の実践においては長期入院などで家族との分離を防ぎ、心の「栄養」として「いい体験」の蓄積の必要性が指摘されている。したがって園芸療法は家族の健康度を上げ本人だけでなく家族の心の活力をあげる集団療法の1つという可能性も考えられた。

⑤家族の参加について 参加への希望は67%であった。したがって上記で述べたように家族の健康度をあげる意味で家族の参加を考慮した園芸療法を計画する意義はあると考えられた。本研究は対象数が少なくまた評価期間も8ヶ月と短かった。したがって今後は症例を重ね対象数を多くするとともに長期間にわたる園芸療法の評価をする必要がある。またアンケートについては予備的なものであり、家族と本人との関係に特化した評価法作りが望まれる。また園芸療法については家族に参加を考慮するなど家族も含めた地域社会でのコミュニケーション形成を視野に入れたプログラムの展開が必要であろう。これにより地域の特徴を生かした心の活力ネットワーク構築が促進される可能性があると思われた。

4. 結論

農学の専門家とデイケアスタッフである医療者が連携して策定した園芸療法プログラムに8ヶ月間継続的に参加したメンバーに対し、園芸療法の前後においては主観的ウェルビーイングの変化を評価するとともに、園芸療法開始8ヶ月後に家族から見たメンバーの感情や行動の変化をアンケート調査した。その結果園芸療法により主観的なウェルビーイングの評価に有意差はなかったものの、家族からみて感情や心理的な変化がみられ、収穫物を通じたコミュニケーションが促進されていることが示唆された。このように慢性期の精神障害者において園芸療法は主観的な評価よりも家族による評価や家族とのコミュニケーションに効果が現れることが明らかとなった。これにより園芸療法の障害者の周囲への効果もあり心の活力のネットワークが広がっていく可能性が示唆された。

5. 成果の発表(学会・論文等、予定を含む)

(学会) 1 高橋弘美、山川百合子、佐々木俊子：精神科デイケアにおける園芸プログラムの取り組み～農学教育者との連携の実践と評価～ 第40回日本作業療法学会(京都) 2006年6月

(原著) 1 山川百合子、小松崎将一、井上栄一、池田正則、山口彩子、中川昌子、高橋弘美、佐々木俊子、登坂ユカ、新井雅信：精神科デイケアにおける園芸療法の心理的効果の検討～地域リハビリテーションと農学の連携～茨城県立病院医学雑誌 2006 ; 24 : 39-47

2 山川百合子、高橋弘美、佐々木俊子、今井忠則、小松崎将一、井上栄一、池田正則、山口彩子、中川昌子、登坂ユカ、新井雅信：精神科デイケアの園芸療法による主観的ウェルビーイングと家族との交流の変化 - 農学との連携による心の活力ネットワークの広がり - 均衡生活学 2006 ; 3 : 20-24

6. 参考文献

- 1) 西園昌久：精神科デイケアの効果。平成元年・2年度厚生省精神保健研究「精神科デイケアと精神疾患の再発頻度および入院期間に関する研究」。1991。
- 2) 小谷英文：集団精神療法の近年の発展。精神科臨床サービス 2003 ; 3 : 263-267。
- 3) 山川百合子、小松崎将一、井上栄一他：精神科デイケアにおける園芸療法の心理的効果と検討～地域リハビリテーションと農学の連携～茨城県立病院雑誌 2006 (印刷中)。
- 4) 館内由枝、島田隆美子、浦野洋子他：園芸療法が精神疾患患者に与える心理的及び生理的効果の検討。医療 2004 ; 58 : 211-215。
- 5) 堀江昌美、岩満優美、北村径子他：園芸療法が精神疾患患者に与える心理的及び生理的効果の検討。精神科治療学 2004 ; 19 : 643-649。
- 6) 高橋美智代、松村人志：抗精神病薬治療下主観的ウェルビーイング評価尺度短縮版の日本語版作成とその信頼性と妥当性の検討。臨床精神医学 2006 ; 6 : 905-912。
- 7) 国谷誠朗、本田裕：分裂病圏患者家族に対するシステム論的家族療法の経験。精神神経学雑誌 1987;89:113-143。